

学 園 広 報

No.66 2018.2

学校法人 平和学園 神奈川県茅ヶ崎市富士見町5-2
TEL 0467 (87) 0131

＜主な内容＞

- 「最善のものは尚将来に在り」
- 幼・小・中・高の歩み
- グローバル教育カリキュラムの実践報告
- 学園行事より
- 諸団体活動報告・法人だより

平和学園幼稚園・平和学園小学校
アレセイア湘南中学高等学校
<http://www.aletheia.ac.jp/>

「最善のものは尚将来に在り」

学園長 所澤 保孝



“The best is yet to be”、私は若い頃の短い英文に接した時に大変戸惑いました。まず最初に、英文をどう訳したらよいのだろうかと思いまし

た。そこには「最善のものは尚将来に在り」と訳が付いていました。ところが、当時の私にとってこの訳文さえも、どういうことなのか、何を意味しているのかさっぱり分かりませんでした。

その後長い間忘れ去られていたのですが、最近になってふと私の脳裏によみがえってきました。今になってこの英文をようやく自分なりに理解できるようになったのは、自分の人生の経験を重ね合わせてきたからです。またこの文が書かれた背景や作者の目的などを調べて、作者の伝えなかったことはこういうことなのかなど、考えるようになりました。

末、健康を害されてアメリカに戻れた先生は、母国で天国に召されました。そのような先生が亡くなられる前に、自らが設立に命を削られた日本の学校の一層の発展と後輩たちが先生の夢を継承してゆくことを願って、アメリカから寄せられた文章の中の一節が冒頭の一文です。

名文家で有名な先生はこの英文を、イギリス人の詩人ロバート・ブラウニングが「ラビン・ベン・エズラ」の中で述べているところから引用されています。繰り返し読んでみようと、ラビン・ベン・エズラの叫びと励ましが伝わってくるような気がします。

“Grow old along with me!
The best is yet to be,
The last of life, for which the
first was made:
Our times are in His hand
Who saith, 'A whole I planned,
Youth shows but half; trust
God: see all nor be afraid!'”

ロバート・ブラウニングは約1000年前の詩人で、テンネー先生がこの文章を引用されたのも80年近く前ですから、古色蒼然としていると思われる方も多いかと思えます。しかし、この英文は英詩の古典の中だけに秘かに存在している訳ではありません。

実は、2008年にバラク・オバマ氏がアメリカ大統領選に勝利した時に行ったスピーチの中にもこの言葉が使われています。彼は「今夜、この選挙で、あなた方アメリカ国民は我々に思い出させてくれました。我々の道のりは険しく、我々の旅は長かったのですが、我々は立ち上がり、反撃したこと、そして我々はこの奥底では分かっていること、アメリカ合衆国にとって最良の時はこれから来ることを。」と力強く演説しています。

また、ビートルズの一員としてボーカルや作詞作曲を担当したジョン・レノンも、1984年にこの詩を引用して“Grow Old With Me”という愛の曲を作っています。

そうです、総じて物事に対する最善のもの、最良の時はこれから来るのです。「最善のものは尚将来に在り」なのです。ここに至った結果だけがすべてではないのです。今の自分の状況が将来を決めてしまう訳ではないのです。今日の一回勝負に負けてしまっても、その先が永遠に失われてしまいう訳ではありません。ラビン・ベン・エズラの言葉は、われわれに将来に対する希望を与えてくれます。

勉強にも同じことがいえます。ソクラテスが「無知の知」で言い表しているように、われわれは大切なことはまだ知らないということを知らなければならないのです。勉強の山の頂ははるか高いところにあります。その頂きに到達した人はまだ誰もいないのです。大切なことは、われわれがみな夢を持ち、神様と共にその頂に向かって登って行くことです。われわれの人生は頂までの道のりだからです。

大人の役割は、教師としてあるいは親として、子ども達が、その道のりを歩んで行くこととするチャレンジを励ましてあげることです。そのチャレンジの結果の出来不出来ではなく、チャレンジ自体を褒めてあげてくれることを忘れてはなりません。

神様がともに歩んでいくのださ、道を備えてくださっていること、
“The best is yet to be!” と言う言葉を信じて、未来へのチャレンジを続けて行くことがわれわれに与えられている使命ではないでしょうか。

聖書の言葉



「神の言葉に導かれて」

あなたの御言葉は、わたしの道の光、わたしの歩みを照らす灯。

詩編119…105

子供の頃の思い出です。私の家は山の上にあり、学校に通う時、行きは30分、帰りは1時間かかりました。道の途中には森がありました。秋から冬になると、日没が早くなってきました。帰る時間が遅くなると途中から、森の中は暗くなっていきました。そのため、森に入る時は懐中電灯がなければ歩くことができませんでした。暗い道を電灯の明かりで、歩いて家に帰っていききました。電灯の明かりは、暗い森の中、自分の足を照らしてくれて、行き先を導いてくれました。

私たちの人生の歩みには、いろいろな時があります。明るい時、喜びの時、反対に不安な時、苦しい時などです。私の高校3年生の時は不安で苦しい時でした。自分が誰なのか、生きていてよいのか、これから先、どうしていいのかわからない時でした。そのような時に、聖書と出会い、聖書の言葉を真剣に読むことができました。一番読んだ時だったと思います。そして、聖書の言葉が私の支えになりました。

学校では毎日の礼拝を大切に守っています。毎日、讃美歌を歌い、聖書が読まれ、聖書の話が語られ、祈りの時を持ちます。この毎日の礼拝を通して、一人ひとりの心の中に、聖書の言葉がたくわえられていくのです。その聖書の言葉が、きつと人生の暗闇の時に、一人ひとりの人生の歩みの支えになってくれると信じます。

(学園宗教主任 横山 厚志)

アレセイア湘南中学高等学校

高3 修養会

高3 D 太田香央里

3日間という時間の中で、「自立と共生」とは何か、と日常ではあまり考える機会のないことに考えを巡らせることができました。

私は、クラスで班ごとに意見をまとめて発表し合った時や、他クラスの考えを聞いた時などに、全く同じ考えを持つ人はいないと感じました。それは、今まで一人ひとりが生きてきた上での経験の違いから生まれる考え、価値観の違いによるものではないかと思いました。そして、自分とは違う考えを聞く事で、自分の考えしか持たなかった私の狭い価値観に新しい視点が生まれ、視野が広がりました。

また、私が皆に共感しているように、皆も私の考えを受け入れてくれていたということに気が付きました。これは、皆が自分の意思を持ちながらも他の考えを退けることなく共感できているということであって、これも自立と共生のある一つの形なのではないかと思いました。

修養会で学んだことの中で心に留めておきたいことがありました。

それは、「他人にただ流されることなく、自分の意志で行動すること」が大切である。」という



言葉です。私は、自分の意見を人に伝えることが苦手なので、これからはこの言葉を糧に少しずつ自己主張が出来るようになっていきたいです。

英国語学研修

高2 B 森 友香

不安と楽しみの中、イギリスへ向かった。まだ先だと思っていた英国研修が始まった。飛行機の中で「Apple Juice, please.」と言ったつもりがblueberry juiceが注がれてしまったので自分の英語力が不安になった。

パンガーに着くと日本との相違点を感じた。町中にゴミ箱が多く設置されていて溢れていることはなかったが、道にゴミがおちているのが気になった。日差しは強いがカラッとされていて過ごしやすいく気候だった。

ホームステイ先から大学へはバス通学だった。イギリスのバスは、横に手を差し出さないと止まってもらえない。運賃は前払いで運転士に行先とチケットの種類の伝えて支払う。私は上手く伝えられず何度もChild ticketを買ってしまったので、Adult ticketを買えた時には達成感があった。降りる時もバス停案内アナウンスは流れない。初めて乗る時は運転士に降りるバス停を告げて教えてもらい、慣れてきたら景色を覚えて降りるようにしていた。バスの中でも町でも挨拶の音がよく聞こえていた。人と人とのつながりが強く皆が親切でよい所だった。バスの中では地元の人を楽しそうに話していたが聞き取れず、何を話しているのか気になった。もっと英語

を勉強していっ

か私も会話に入れる日が来たら良いと思った。

2週間、



自分の国、家を離れたことは自分が成長する良い機会だった。この経験を生かし、今後の生活を送っていききたい。

オーストラリア語学研修

高1 E 田中 佑季

私はオーストラリア語学研修に参加して、良い経験ができました。

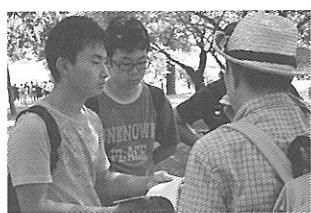
私は今回初めてホームステイをしました。行く前は、楽しみでしたが英語が苦手なので、きちんと会話が

広島平和の旅

高2 B 鈴木 碧人

僕が広島平和の旅に行き、最も大切だと思ったのは、今後、原爆や戦争によって起きた悲劇をどうやって繰り返さないようにするかです。

僕は今回の旅で原爆がどういう物で、どのような被害をもたらすかについて学びました。今までは、これほどしっかりと原爆について学ぶことはなく、原爆は危険だということを知っているだけでした。しかし、



原爆についての話や資料を実際に聞いたり見たりする度にその怖さが募りました。血のついたボロボロの服や被害にあった人の写真、原爆が

できるのか不安がありました。しかし、思っていた以上に楽しかったです。ホストファミリーも親切にしてくれて心配していた会話もでき、日本の話もたくさんできました。

学校では、初日は多くのことでとまどいました。しかし、オーストラリアでの友達と一人できるとそこから輪が広がり、たくさん友達が増えました。

授業はすべて英語で、何を話しているかわからない部分もありましたが、受けるたびに英語が聞き取れるようになり、後半になると、少しずつ内容がわかるようになりました。

私はオーストラリア語学研修に参加して、自分からコミュニケーションをとることの大切さを知り、コ

落とされる前後の広島姿。そういうものを見る事で原爆によって何が起きたのかが分かりました。

また、被爆した方の詩を詠むという朗読会に参加し、当時の人の心と体験を知ることができました。僕はこの詩の一つの「第1」という詩を朗読して、自分がその状況になった時を想像して家族を助けることができると考えさせられました。

より多くの人に原爆の怖ろしさを伝えることによって、原爆の悲劇が繰り返されないことを願っています。

高2 B 川東 虎太郎

私は今回の旅で、自分の目でたくさん物を見、たくさん人の事を感じました。熱で溶けた石や墓石、爆風でどこかへ行ってしまった石の塔の跡地。他にも多くのものを見ました。

私はテレビで放映していた情報しか持っておらず「こんな爆弾作らな

コミュニケーションをとるためのほんの少しの勇気が必要である事も知りました。

私は、この研修を通してその勇気を出せるようになりました。その勇気がなければ、バディともホストファミリーとも仲良くできずにいたかもしれません。

今後は初対面の人とでも、この勇気を出して、コミュニケーションをとっていききたいと思っています。



ければいいのに」くらいしか考えていませんでした。しかし、被爆された方の話や詩などを聞き、いろいろなことを考えさせられました。中でも「人の生きた証が無くなる」という言葉が一番心に刺さりました。たった一度の爆発で人が大勢亡くなられただけでも十分すぎるのに、今でも分からない人が数えられない程いる。そんなことを起こす物はないのではなく、存在してはならないし、また、この事が色あせてしまふこともあつてはなりません。

先日、朝鮮民主主義人民共和国が水素爆弾の実験をしていました。心が痛みます。あんな物を新しく作ってしまう今の世の中を変えることができるのは、私達のような若い人間です。あと2年もすれば私にも選挙権が与えられます。正しい選択をし、小さな一票を無駄にしない大人になりたいです。

平和学園幼稚園・小学校

幼稚園

遠足

幼稚園では毎年辻堂海浜公園へ遠足に出かけています。

遠足当日、子どもたちはリュックにおやつを少し入れて、いつもよりもワクワクした様子で登園。普段ならカバンを置いたら外へ飛び出していく子どもたちも、部屋の中で静かに嬉しそうな様子で椅子に座ってみんなが集まるのを待っていました。

みんながそろったら、年中・年長児が友達と手を繋ぎ幼稚園を出発。持ってきたおやつのことなどを楽しそうに話ながら歩くと、あつという間に汐見台公園です。年中・年長児が公園でおやつを食べ休憩をしているとバスで出発した年少児が到着し、年長児と手を繋いで海浜公園を目指します。



年長児は年少児の小さな手を取り、小さな歩幅に合わせて歩みます。公園までは一本道ですが、年少さんが、「まだ?」「まだ?」と、尋ねます。

「もうすこしだよ。」「ママがまつてるからね。」

疲れてきて泣き出しそうな年少さんに、歌をうたつてあげている子どももいます。靴が脱げたら履かせてやり、隣の小さいひとのものを一生懸命思いやりながらの30分です。

年長の子どもの年少児へのこの関わり方は、年少児の入園当初か

らお世話をする毎日の積み重ねでできるものです。自分も年少の頃に年長児にお世話になった経験があるからこそ、自分たちが年長になった時に思い出して行動することができ

ののです。

公園に到着すると、保護者の方達の拍手の花道をくぐります。どの子どもも誇らしげな笑顔で通り抜けました。これが平和学園幼稚園の遠足です。

(教諭 一色 里絵)

おいもほり

5月下旬、里山公園近隣の畑に年長組が芋の苗植えに出かけました。初めてみる苗に「この根っこがお芋になるの?」「どうして土の中にうめるの?」と子ども達の頭にはハテナがいっぱいです。最後に「おいもができたら、またあおうね」とバスから手を振り帰ってきました。

1学期の終り、2学期初めには年少組と年中組がそれぞれ芋畑へ苗の成長を見に行きました。畝にちよこんと飛び出す苗に「これなあに?」と年長組と同様、目の前の苗が子ども達の大好きな芋とはなかなか結びつかない様子でした。そんな子ども達もやはり芋の収穫が楽しみなようで畝の周りを「おおきくなあれ、おおきくなあれ!」とぐるぐる歩き回り、収穫



を楽しみに見学を終えました。

台風の影響で延期が続き、例年より遅い収穫となった11月、全員で芋掘りに出かけました。朝幼稚園に登園してきた子ども

たちは水筒を持って、準備万端で出発しました。芋畑に着くと、土から延びるツルと土から少し顔を出しているおいもに、子どもたちは大興奮でした。連日の雨のせいか、土が固く、掘り出すのに一苦労でしたが、「こーんなにおおきいよ!」「あーちゃんおいももついできた」と小さな手をどろんこにして掘りました。

年中組では収穫感謝週間に年長組から頂いたカレーのお礼に、おいもご飯を作りプレゼントしました。

「こればくちがはったおいも?」と自分たちで収穫したおいもを使ったクッキングにんだか誇らしげな様子の年中組でした。他の組もそれぞれ芋掘りを終え、秋の実りに感謝しながらおいしくいただきました。

(教諭 桑原 蘭子)

小学校

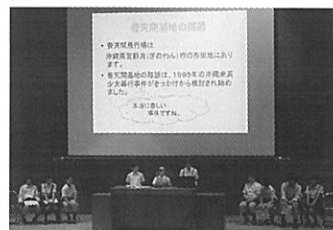
平和とともに

当初、「平和とともに」は、平和に関する本の感想文の発表会でした。平和を考えるきっかけにはなりましたが、「平和をつくりだす人」となることをより深めるべく、現在の行事に発展しました。

初日の講演は、卒業生の保護者、中澤優子さんがなさっている国際協力や外国で起きている問題についてのお話でした。「私達は遠い世界のことに、近くの家族やお友達ののと同じような気持ちや関心を持つことができる」ということが心に響きました。1・4年生の発表では、

子ども達各々の心にある「平和」をメッセージとして伝えます。初参加の1年生にも「平和」があり、学年が上がる、積み重ねてきた「平和」があります。「平和とは」「平和をつくりだすとは」：答えは一つではないことがわかりました。

翌日の礼拝は5年生のお話です。



平和をつくりだす人

に人々を当てる、そこから自分のこととして「平和」を考える内容でした。

5年生は全体の準備や進行も、見えないところでの奉仕も担います。昨年までとは違った視点で「平和」を捉える機会となったことでしょう。6年生は戦争や基地問題について学ぶ時間が大半を占める沖縄修学旅行の報告です。旅行を通して変化していった子ども達の気持ちから、いかに貴重な体験をしたのかわかります。一方、見聞きしたことを伝えるのは難しいことです。しかし、4年生の感想に6年生が伝えたかったことがしっかりと受け止められていました。「2年後には私達が沖縄に行き、平和のバトンが渡されます。戦争の残酷さを学びます。」「私も平和をつくりだしていきます。」「とありました。

「平和とともに」は、平和学園の歴史の中で引き継がれ培われてきた創立者の想いを探り、確かめる行事と言えます。自分が考え行動できる「平和をつくりだす人」に、また一歩近づけたようです。

(教諭 勝間 亜紀子)

ファミリー運動会

「運動会は楽しく緊張して挑むことが大切です。」(体育委員長の運動会開会挨拶より)

ファミリー運動会は2年に一度の開催で、今年度がその年です。10月初めに行われ、皆様の祈りに包まれて、子ども達の笑顔とがんばりが輝く清々しい一日となりました。



実際にダイナミック。これぞ「平和学園の原点」ではないでしょうか。

(教諭 高岸 博康)

さて、名前にファミリーといっているのは何故でしょう。これはずっと昔からです。小学校は小さな所帯なので、ちゃんとした運動会を想像される方もおいででしょう。しかし、この会を何度も経験した私は「小さいからこそ何ともダイナミック」という思いが募ります。自画自賛ではなくその訳を考えてみました。それは、全学年の一人ひとりが主役となつて全てを担い、練習し、壁にぶつかり、突破して、晴れ晴れと躍動できる会だから。そして、保護者も競技に参加して大人の凄さを見せつける。教員も大いに楽しむ。つまり、ファミリーとしての結びつきをより強く実感できる一日が本校の運動会なのです。さらに、私達の中にはイエス様がいてくださる。十字架の横棒として子どもも保護者も教員も結ばれる。縦棒としてファミリーが天の神様と結ばれる。二つが交わる所にイエス様がいてくださり、今年も豊かに支えてくださった。

初代校長の村島帰之先生が開校式で「自由であたたかい楽しい学園」と述べられた思いがファミリー運動会には脈々と生きています。

力一杯がんばる子ども達の顔も心も最高です。悔しがるのもよいものです。ほんわかしたみんなの賜物が輝くファミリー運動会

幼小中高一貫グローバル教育カリキュラム

「たくましさ」を育てる

将来、子どもたちは、様々な価値が交錯するグローバル社会で生きることになります。

「たくましさ」というキーワードには、「グローバル社会の中で自分の意見を述べる事ができる人になってほしい、また、多様な価値観の中で、物事を前向きに進めるために、粘り強い努力ができる人になってほしい」との願いを込めています。この「たくましさ」が平和な世界をつくるために大切な資質の一つであると考えているからです。

そこで、主体的に行動し、困難に出会ってもへこたれずにやり抜く子どもを育てるプログラムを、各部で年齢に応じて準備しています。

幼稚園

遊びが育む「たくましさ」

平和学園幼稚園では、自立(律)を目指した保育を行っています。自立(律)は「たくましさ」の原点といえます。

3歳で入園した年少組の子ども達は、年中・年長児に、朝の支度から弁当の準備、片付けや掃除まで面倒を見てもらいながら、その動きを真似て自分たちの中に取り入れ、やがて自立して自分たちだけでも出来る様になっていきます。

秋の運動会のプログラムの中で、年少児は年長児がやっていたチアダンスを興味深そうに見ていました。年少保育室隣のホールでもチアダンスの曲が流れ、日々練習している様子も見聞していました。

運動会の翌日のことです。昨日までの空気が残っている中で、年少児は言いました。

「曲をかけて！」

子どもたちの要望でチアダンスの曲をかける、いつの間にか覚えたフリで楽しそうに踊り始めました。それを聞きつけた



年中・年長児も自然に参加するとう光景が数日間続きました。やがて年少児は、他学年の子どもたちや保育者に「ダンスをやりますよー」と誘いに行く程の行動力を見せ始め、誘われた者も、その誘いに応じていました。

自分が興味を持ち、行動に移す。更に、それが他者への誘いに発展し、誘いに応じる者との関わりに広がる。ここには、コミュニケーションが成立しています。このように育まれている年少児の積極性、行動力に「たくましさ」を感じずにはいられません。これが、本園が大切にしている「遊び」のプログラムなのです。

(教諭 細矢 真由美)

小学校

日々の生活の中で

「たくましさ」の辞書の意味は、意気・勢いが盛んであるということだが、平和学園の児童は人間に対して好奇心が旺盛だと感じる。これは他者に対して心を開いているということだ。その児童達が何に興味を持ち、追い求めているのかを知るには、20分休みの時間や放課後に校内をふらりと歩いてみるとよい。

校庭でボール遊びに興じている人、

虫を捕まえて大騒ぎしている人、一輪車の練習を繰り返している人、じつと将棋の対戦をしている人、図書室で黙々と読書をしている人、けん玉の新技練習に夢中になっている人。そこには必ずと言っていいほどそれを共有する人々が存在している。他者に自分を受け止めてもらっていることの安心感があることで、お互いを理解し合える人間関係も見られる。一方、友達、親や教師など、他者とうまく関わるといふ「試練」の中で「たくましさ」が育まれていく。



「たくましさ」の根源を考えると、日々聖書を通して他者と共に生きるとはどういうことかを問い続けるといふことに行き着く。そこには大人も子どももない。共に求め、動き、そして共に祈る。これを心に留めて毎日を生きたことが子どもたちの「たくましさ」に繋がっていくと実感させられる。

この「たくましさ」は一朝一夕に培われるものではない。目に見えるものでもない。小学校の6年間という時間、日々の生活そのものが、「たくましさ」を育んでいるものとして大切にしていきたい。

(教諭 雫 永法)

中学校

職業体験を通して

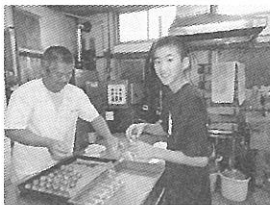
アレセイア湘南中学校では、2年生の総合的な学習の時間の中で「職業体験」を行います。本校の職業体験の特徴は二つあります。

一つ目は、体験先を学校から指定されるのではなく、自分で見つけ確保することです。4月になるとなぜ

仕事をするのか、自分はどんな仕事に就きたいのかなど、考えます。そして、希望する事業所について調べ、情報を収集します。『依頼方法のガイドダンス』に沿って依頼の電話をかけ交渉します。知らない事業所へマナーを心掛けながら電話をかけるのは初めてのことです。突然の電話に叱られてしまうこともありますし、お願いしても断られてしまうことも少なくありません。

二つ目の特徴は、一つの事業所に一人で行くことです。事前の打ち合わせにも一人で出かけます。体験中も自分で考え、わからないことがあれば自分から聞いて働かなくてはなりません。

9月の体験日当日には、緊張して出かける生徒たちですが、半日働いて翌日登校した時には充実した顔つきでそれぞれの体験について語り合っています。どの職種を体験した生徒も、仕事をしていくにはコミュニケーションが大切だといふことを知ったと述べています。挨拶・笑顔・積極性の大切さを実感しているようです。



今年で3年目を迎えた『職業体験』ですが、趣旨を理解し受け入れてくださる事業所が増えています。お忙しい中で温かく教えてくださることは有難いです。

12月には、一人ひとりが体験内容を紙芝居にまとめて発表し、一連のプログラムが終了します。

(教諭 市毛 直子)

高等学校

留学生との交流

いつでも どこでも 誰とでも」

協力できる人を育てるというグローバル教育に基づいて、高校2年生では、留学生との交流が計画されています。

今年度も10月に、東海大学から、タイ、中国、韓国、トルクメニスタン、カナダ、オーストラリアなど世界各地の留学生が来校し、日本語で母国の話をしてくださいます。知らないことがほとんどで、興味を持って話を聞くことができました。また、私たちも、毎日の学校生活を英語を交えて紹介したり、グループやクラス全体でゲームをしたりと、楽しい時を持ちました。後日、留学生の方々から、丁寧な日本語でお礼状をいただきましたが、「アレセイアの生徒は皆、親切で、楽しく過ごせました」とのことでした。

限られた時間の中で、どのクラスも、学校のことを知ってもらおうと細かくプログラムを立てて取り組みました。多少の失敗はありましたが、気にせず、また初対面でも物おじせず話しかけることができ、たくましくなつたと感じしました。

今後の課題

としては、いつも身近にいるクラスの仲間、部活動の先輩、後輩たち、あるいは家族に対して、思いやりを持つて接すること、お互いの違いを認め合うことのように思われます。身近な存在だからこそ難しいことですが、まずは最も小さな平和を大切にすることを育てていきたいと改めて思いました。

(教諭 平鋪 容子)



クリスマス礼拝 12/18

「馬小屋に光はあった」

平塚富士見町教会 児玉 慈子
ヨセフとマリアは、神様に選ばれてイエス様の父、母となる決断をし、赤ちゃんのために生まれました。人は、自分のためにこうしたいとまず考えます。しかし、実は自分のためだけではなく、誰かのために何かができる時、自分のために何かをした時よりも大きな喜びが与えられます。

ヨセフとマリアのもとに羊飼いや博士たちが来ました。自分のために来たものではありません。神様が与えてくださったイエス様のために集められた人々たちです。自分のためではなく、神様のため、人のために生きる者が集められた場所、それが馬小屋の場面です。

テロや紛争はこの地上で起こり続けています。ずっと闇のような出来事が起こるなかで、クリスマスを迎

東北平和の旅 8/1〜8/3

「天津波警報が発令されたら高い所へ移動しながら、さらに高い所へ次々と上へ逃げる。」当時七十七銀行女川支店に息子が務めていた田村さんのお話だ。

行員13人は2階建て支店屋上へ逃げました。約30分後津波は屋上まで到達し12人が犠牲になりました。走れば1分で行けた高台、堀切山があったのになぜ目の前の高台ではな



避難指示が出されたのでしよう。実際に現場を訪れる



小学校3年生が演じたページェントのなかで馬小屋に与えられた光を見ました。その光を心に持ちながら、新しい年へと歩み出したいと思っています。

収穫感謝礼拝 11/10

白十字会林間学校の皆さんと共に

平和学園では毎年、幼稚園から高校まで全学園で、秋の実りに感謝を捧げる礼拝を守っています。今年は、11月10日(金)の朝、秋のキリスト教強調週間の中で、生徒達や教職員が各家庭から持ってきた野菜や果物を講堂の講壇の上に飾り、礼拝を守りました。今年初めて、小学校の奉仕委員とアレセア湘南中学高等学校の宗教委員が一緒に、その日の夕方に隣にある白十字会林間学校に行き、野菜や果物をお届けし、収穫感謝礼拝と一緒に守りました。



白十字会林間学校は、1917年9月、日本で最初の、虚弱児のために医療と教育を備えた寄宿制私立小学校として設立されました。平和学園の前身であり、戦後の制度の変遷に伴い、現在に至っています。今年度、創立100周年を迎え11月23日に賀川村島記念講堂で記念式典が行われました。

(学園宗教主任 横山 厚志)

に耳を傾けてみて、それが「つもり」でしかなかったことを痛感しました。なぜ被災された方はつらい経験をお話ししてくるのか。それは、「生きていて欲しいから」と、皆答えていた。

皆さんも一度被災地に足を運び、生きることについて考える時間を作ってみてはどうだろうか。

(中高教諭 山崎 大輔)

学園教職員夏期研修会 8/29〜8/30

今年の夏期学園研修は「平和学園教育のアイデンティティーを訪ねて」というテーマのもと行われ、平和学園に勤める私達の立つべき場所を再認識する良い機会となりました。

一日目の講演は、東日本大震災を女川第一小学校校長として経験された星圭先生の「教育の使命」。子ども達の命を預かる責任の重さ、防災教育の重要性、子どもたちの生きる力、子ども達と共に過ごせる喜びと尊さ…。先生の「茅ヶ崎は未災地」、「(子どもを)まっすぐでめんこがる」、「笑顔で子ども達を迎えてください。」というお言葉一つひとつに重みがあり、今も心に響いています。

続いて、夏村充元学園長による「平和学園が大切にしてきたこと」。賀川・村島両先生がこたわられたキリスト教主義の学園であること。当時の先

生方が話し合い、祈り合い、考えを束ねて作られた建学の精神。様々な考えを認め合い、意見の違いが大切にされてきた学園の歩みに、平和学園の根底に流れるものを感じました。

二日目は関東学院宗教学部の松田和憲先生による「キリスト教学校の歴史の変遷を振り返り、現在の多くのキリスト教学校が抱える課題について考え、恒久的な祈りの指針が示されました。その後のグループ討議では、他学部の先生方とまるで聖書研究会をしているような豊かな時を過ごすことができました。

この研修で考えを深めた平和学園のアイデンティティー。これからの学園を受け継ぐ力としていきたいです。

(小学校教諭 高木 優子)

変わっても平和学園が大切にしてきた不易のものである。教育の目的は、知識・技術を授けるだけでなく、どのような人格を育て世に送り出すかということである。それがその学校のアイデンティティーではないか。

昔からの平和学園を知っている我々世代の教師たちから、やがては若い世代にバトンタッチされていく、生徒数の増減や進学実績など、目先のことにとらわれ、平和学園の教育の根底にある不易のものを失ってはならないということを受け継いでほしい。そこにこそ、平和学園の存在意義があるのでないか。

時代に流されることなく、今こそ地に足をしっかりとつけ、「平和のこころ」を育む教育をしていかなければならない、と痛感した研修会であった。

(中高教諭 白井 あゆみ)

